

裏切りの代価 —「正義以後」を考える—

伊原木大祐

本発表は、レヴィナスの『存在の彼方へ』を「裏切り」についての書物と見なし、その帰趨の一端を考察している。たとえ「存在するとは別の仕方」で機能する「無 - 始原」と呼ばれる場であっても、それが存在論的 - 存在者的なフィルターをとおして指示されるのであれば、やはり何らかの裏切りの影響を避けることはできない。存在の手前がこのような事後的な必然性をもった現出において裏切られ、かき乱される典型的な状況は、いわゆる「第三者」の入場とそれに伴う「正義」において描き出されていた。この正義が「必要である」とレヴィナスは強調する。本発表の目的は、正義が樹立された後の段階で働く無始原的なものの行方を考察することにある。

前半部でまず注目したのが、「彼性」に対する私の無始原的關係が第三者入場によって裏切られるという、レヴィナスの記述である。ここでは〈無限〉の過ぎ去りが、顔としての他者に赴くよう私に命じる指令的契機ではなく、私を他の人々の間に挿入して相対化する恩寵的契機となっている。「人質」であるべき主体性は同時にまた「市民」なのである。このとき、〈無限〉は私を他者の身代わりに指定しながらも、他方で私に市民としての地位を与えることになる。こうした私に対し、無始原はどのように機能しているのだろうか。

後半部では、『存在の彼方へ』の第6章冒頭にある、ゲーテ『ファウスト』からの題辞を手がかりに、いわば正義以後の「人間的なもの」の様態を探っている。ここで「人間の最善の持前」として称賛されている「戦慄」は、本文中で正義の戦争における存在の弛緩と関連づけられており、同じ文脈上で「この弱さ」が「必要である」と言われていた。正義の必要性から弱さの必要性への、こうした転換に、暴力の永続化や制度化に対する防波堤を見いだすことができる。それは、戦争にふさわしい「男らしさ」を緩める、代えがたい美德の力である。

結論部では、『存在の彼方へ』をとおして目下の状況を問い直すこと、目下の状況をとおして『存在の彼方へ』を読み直すことがいかに重要であることを示した。他者の身代わりとなる一者に関する記述は、われわれ人間の内部にある「弱さ」を掘り起こし、意識の手前から意識下のさまざまな善き感情を喚起しているように見える。発表の最後では、このような弱さの感情を共有する「私たち」の共同体について、レヴィナス思想から出発して考え直す可能性を提起している。